

色彩環境論 (9)

景観保全と色彩誘導について・金沢 ①

- 都市周縁問題 -

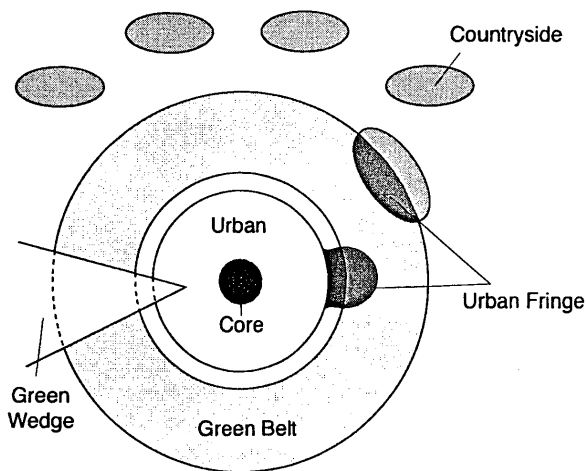
山 岸 政 雄

はじめに

都市の良否を、建造物の発する色彩情報を繋ぎとして知見する試みは、既報研究でも何度か触れてきた。その結果さらなる二つの問いに出会った。ひとつは都市の増殖によるアーバンフリンジ (Urban Fringe) 問題であり、もうひとつは市街地中心部の空洞化による景観破戒である。この現象は1960年代の所謂ドーナツ化現象と言われた単なる職住分離ではない。都市に仕掛けられた複合的な情報戦の兆しである。景観から発せられる色彩情報は千差万別で日々存在が既得化している。むかし騒色いま奇色といったら過言であろうか。各々の都市はこのことに対処し防護するために景観条例等を整備し奮闘中である。しかしいまだ経験したことのない様相に苦慮しているのが実情であろう。ゼウスのパンドラの箱物語に類同すれば、良識の色は箱の底に残され、罪悪と災禍の奇色、パンドラカラーが振り撒かれているのでなければよいのだがと願ひ研究の緒とした。20世紀が終わりやがて21世紀を迎えようとしている。この地球上で起こっている様々な問題の中で最も解決の急がれる事柄に環境問題がある。なかでも都市情報の質を決定づけると言われる景観は、言い尽くされながらも未解の分野がまだまだ多い。表題とした郊外景観の変貌についての問いも例外でない。ことに本調査では世界遺産にも事例があるように、来る世紀における動態保全財としての伝統都市の景観保全施策は急を要する。そこで都市周縁の構造問題については、イギリスの施策事例に接点を求めた。また色彩問題については伝統都市金沢の近郊景観を事例に調査を行い、その差異類同から問題解決の知見を試みることにした。

1. 言わずもがなの彩り-イギリス地方都市のシビックプライド

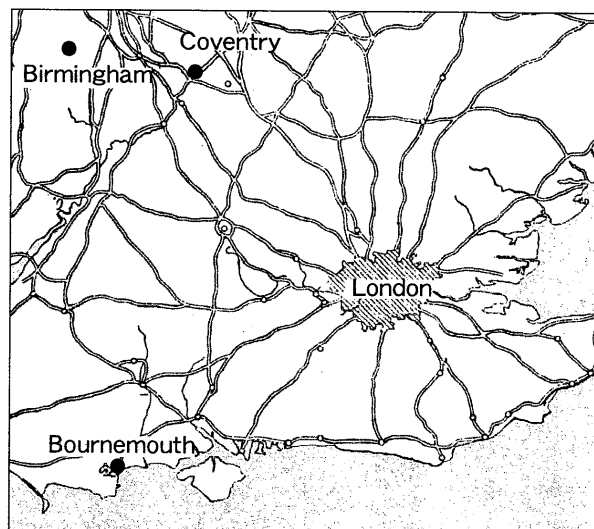
よく知られているようにイギリスは、18世紀の産業革命で黒煙問題など多くの環境問題を経験した政策施策の先進国である。ことにかけてえのない自然地帯や歴史的遺産建物の保全には先駆的な対応があった。とりわけ1895年、3人の市民が起こした保全運動はやがてナショナルトラスト法(1907)制定の契機となる。あれからおよそ一世紀、「1人の1万ポンドより、1人の1ポンド」をスローガンに、環境保全のための譲渡不能の施策が美しいイギリスを護ってきた。1931年の早くから保全のための土地や建物の寄贈には相続税も免除されていて、その結果今日ナショナルトラストにはおよそ20万ヘクタールの土地と、300程の歴史的建造物、100以上の庭園、700キロに及ぶ海岸線が登録された。色彩学の祖ニュートンの生家(イングランド中部ウールソープ村)とその一帯の保全も名高い。年会費は3,000円位のような。また近年では1957年に設立された都市環境保全の啓蒙団体シビクトラスト (Civic Trust) の活躍など、環境保全の誇り高きノウハウも持っている。このような他国の様子を私はいつも羨ましく思っていた。そして最近気になっていたのが都市周縁部の色彩の様相である。金沢を例にとっても明らかなように、次々と建てつくられる巨大なショッピングセンター、流通ターミナル、工業団地、通信タワー、産業施設、スポーツスタジアム、住宅団地などの建造物と、乱立するサインや看板の色彩が景観を損ね、不整合な地域環境を引き起こしていることへの心配である。そんな折り、このような都市周辺の農業と都市的土地利用が混在した地域での不整合は、わが国のみならずアーバンフリンジ (Urban



アーバンフリンジ概念図

Fringe／都市縁辺部) 問題として各国でも対応が急がれ、そのモデルがイギリスにあることを知り表題の比較調査研究をすることとなった。また学際研究ゆえにイギリスの地方自治制度に造詣の深い都市問題学者、小林昭教授(金沢大学)と共に1998年9月に二つの都市を訪ねた。イングランド南西部のボーンマス市(Bournemouth)と中央部のコヴェントリー市(Coventry)である。そこは市(Urban Aria)とその外周の緑地帯(Green Belt)によって一体化された絵のように美しい田園の風景、ピクチャーレスクに出会えるところである。ドーセット州ボーンマス市はロンドンから南西に列車で3時間、あのタイタニック号が出帆したサザンプトンの隣り、人口15万人の小さなユートピア保養都市で、イギリス海峡を望む穏やかな海岸線と、丘陵に沿って見え隠れする美しい街並みは彩色都市のモデルのようである。訪れた市役所の企画保全担当官は、日本におけるアーバンフリンジ問題の説明にうなずきながら、こちらでも問題が山積していると事例を示し施策対応を語ってくれた。

拡張する市街地のグリーンベルトへの迫り出しと、さらにはその外周に形成された田園住居地区(Countryside)からもグリーンベルトが浸蝕を受け、都市縁辺部農村を巻き込んだアーバンフリンジ問題についての見解と対応である。この遠因には、1980年以来強いイギリスづくりの自助努力を求めたサッチャー政



イギリスの調査都市

権による規制緩和や財政削減が関わっていると言う。大幅な規制緩和で新興富裕層となった人達が、そのステータスシンボルを求めてカントリーサイドに割り込んだり、グリーンベルトの住宅地への用途変更を要求することなどであるが、これに対して市側では財政難に翻弄されながらも、グリーンベルトと歴史的建造物や街並みの保全に懸命であることが伺えた。またこのような事態が発生し易いところは、一般的には政治的組織や都市計画の不備などところが多く、気になる日本の隣接農村の風景瓦解もこれに当たるのではなかろうか。

ところで危うい状況に当面しながらも救いとなっていたのが景観に配慮しコントロールされた建物の色彩であった。例えばフリンジ近くで開発中の新興住宅団地でも色彩だけは暖かいレンガ色でコントロールされ、ドーセットの森(Forest)の緑に程よく馴染んでいた。開発のリスクを背にしながらも可能なかぎり美しい景観を保全しようとするプライドはさすがと言ってよい。同様のことは市街地公園の照明ポールなど環境用具は全て濃い緑色でコントロールされ、また商店街も多彩でありながら騒色にならない節度ある市民感覚にも伺える。街の明るさや彩りに気を使い色調を揃える言わずもがなの良識が格調の高い公共空間を形成していた。まれに周囲の様子にそぐわない色使いをする市民もいるようだが、行

政は良い関係で話し合うことに徹し次善の策に落ち着く場合が多いとのことであった。あらゆる環境保全は約束事であって、それを記したマニュアルは慣熟かつ即効的に機能していた。

次に訪れたコヴェントリー市は、イングランド中央部の歴史、工業都市で人口30万人である。軍需産業が集積していたことで、第2次世界大戦では市街地の全てがドイツ軍の空爆で破壊された。それゆえに新しい街づくりにも、過去を記しながら思いを新たにすデザインがそこ此処に見られた。なかでもセント・ミヒヤエル大聖堂は焼け残った骨格を保存しつつ、隣に近代的なコヴェントリー大聖堂を建てることで忌まわしい戦争の風化に抗している。広島の原因爆ドームを連想させる。残骸のレンガ色と新しい大聖堂のステンドガラスの光と相俟った複合景観の創造が、さらなるシビックプライドを担保している。日本も第2次世界大戦で多くの都市が被災したが半世紀を経て顧みるに、景観やアメニティーの再興ではかなりの差が出てしまった。ボーンマス同様、この市においても縁辺部問題は国家レベルで定める開発プランと、地方州政府のポリシーの狭間で如何に効果的な保全策を進めるかが課題である。その代表的成功例として楔形緑地(Green Wedge)誘導策を見聞することが出来た。都心にグリーンベルトを引き込む

もので、豊かな緑が建物や道路などと重なって見え隠れの効果を生み、環境の表情を大変美しく穏やかにしていた。緑被へのこだわりは環境権そのものである。緑地帯を市街地に引き込み市民と緑との接触比率を高めるようとの案は、1932年ロンドンのためにR.アンウィ卿によっても提案されたことはよく知られている。

ところで日本の都市周縁農村の心配事はあまりにも多い。農業基本法が改正され新農業基本法を控え、会社制度や給与支給耕作者制度、食料自給率42パーセントの確保など難問山積である。また休耕田保証も廃止になるが美田が戻るには数十年を要する。そんな日本の現状を考えながらイギリスで得た大きな教訓は、言わずもがなを自認する自発自助の市民感覚である。色彩保全を掲げる西欧都市の法令(Ordinance)や条例(Regulations)もこのコモンセンス(良識)に支えられている。シビックプライドこそ騒色から都市周縁の環境を守る最後の砦かもしれない。

下掲写真は、近郊化による景観破戒と再生手法がグリーンベルトと郊外住宅そして都心との情報の共有にあることを伝えている。

・ボーンマス市の環状型グリーンベルト(写真1-1、1-2、1-3)・コヴェントリー市の楔形グリーンベルト(写真2-1、2-2、2-3)



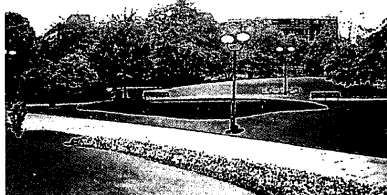
(写真1-1)



(写真1-2)



(写真1-3)



(写真2-1)



(写真2-2)



(写真2-3)

2. 金沢市近郊調査に係わる事由

冒頭にも触れたように、日本のみならず様々な都市で近郊化ないしは郊外化による変貌が進み、その複雑な解には行政はもちろんのこと市民にも多くの問いかけがなされている。ここでは客観的な項目に基いた現況と実体把握を旨に、変貌の様子とその対策を調査検討したい。

[1]近郊化の状況について

・金沢市の現況(1998年10月1日現在)

面積/467.77 km²
 市街化区域/81.96 km²
 人口/457,100人
 世帯数/176,123世帯
 当初予算/34,431,015万円
 商品販売額/390,334,414万円
 製造品出荷額等/61,753,188万円

金沢市に隣接する町村、市街で起きている近郊化の主な原因は二つある。第1は金沢市中心市街地の空洞化との抱き合わせによる代替の郊外化である。空洞化による金沢市中央部の5つの学区の人口は20年前に比べ44パーセントも減少し、金沢市全体の人口比では8パーセントと極めて少なくなってしまった。商店数も過去10年で半数に減りまた売上も10%以上減少している。(データ:シグマデザイン/1999/5月14号)政府は放置できかねるこのような都市問題に対応するため、中心市街地活性化法(平成9年施行)によるTMO(タウンマネジメント機関)組織推進などでその回復に懸命である。さらに空洞化の一般的原因は自動車社会の到来による移動の拡大と、駐車場の確保、家族の高齢化と核家族化による分離居住の発生や職場環境の郊外化による人口動態の変化、さらには庭付き一戸建ての住宅願望など生活欲求の拡大である。合わせて中心部の空洞化は生活空間の崩壊につながるため、いち早い対策が必要になっている。

第2の要因は世界の資源を商品化し、流通経済をグローバル化した巨大なスーパーセンターや大型店舗、

レジャー施設、流通センター、工業団地などの立地進出による地域変貌で最も大きな要因である。また中食(なかしょく)とも言われるファーストフードのあらゆる種類のコンビニエンスストアや飲食店の出店は風景を一変し、いまそこにはかつての穏やかな近郊農村の面影はない。ことに大規模小売店舗の立地による地域環境の変化は、わが国の都市が経験したことのない重大な関心事となっている。

現在全国には約3,000店舗の大型店があり、そこでは大型店周辺地域の交通渋滞や夜間の騒音、廃棄物の処理など社会的問題が発生している。

このように急激な現象が起こった背景には、近年の自動車社会への移行と、さらなる貿易自由化による大規模小売店の立地緩和がある。需要構造が変化し、消費者獲得とは言え、激しい色使いの店舗が景観を破戒していることは、まちづくりや環境問題のみならず「美しい日本」の問題として政府レベルの早急な対応が待たれていた。そこでこのことに対処するため政府は、平成10年の第142国会で大規模小売店舗立地法(大店立地法)を成立させ、同年6月公布し諸般の改善に政策的対応をすることとなった。施行は平成12年6月1日である。担当の通産省産業構造審議会流通部会・中小企業政策審議会流通小委員会とその合同会議は、国民の意見をも求めている。同法の中核をなす第4条「大規模小売店舗を設置するものが配慮すべき事項に関する指針」について通産大臣への答申案に盛り込まれたこの指針を公表し、一般の意見(パブリックコメント)を求めることになった。つまりそれほど問題は深刻なのである。このことは本調査とも期を一にしているため、以下の報告の利便に資するためにも判断指針とその要点を留めておきたい。

①駐車需要の充足等交通に係わる事項について。ここでは交通渋滞を懸念し、休日ピーク時の車台数と駐車スペースの調整を計る視点などが盛り込まれている。

②騒音の発生に係わる事項について。環境基本法第16条に基き、生活環境を保全する上で望ましい基準を求め、周辺住民と協議しながら防音壁を設けるなどが建議されている。

③廃棄物に係わる事項等について。廃棄物の排出量原単位を決め、店舗面積や業態ごとに排出予測量を算定し計画廃棄する。廃棄物の種類も紙製廃棄物(段ボール等)、空き缶、空き瓶、厨芥その他廃棄物等に限る分け方が示されている。

このようによく環境面の影響を重視した大型店の出店規制が始まったが、良策を目指す法律であるがさらなる意見もある。規制緩和を強く迫るアメリカは、出店を審査する自治体が地元で配慮して恣意的に判断するのではと懸念していると言う。しかし通産省は店の面積や駅からの距離を細かく分類し、自治体が指針に基づいて客観的に判断できるようにすることで対応できるとしている。ただ色彩や景観、植栽のようなアメニティやデザインに係わる切り口が全くないのは実態的にバランスを欠いている法律ではないかと思う。

[2]近郊地域の活用及び規制に係わる諸制度

①土地利用調査(Landuse Survey)

・用途分類/都市計画法(1968)市街化区域/市街化調整区域(市街化不向き地、都市農業地、緑と自然の確保地)

・用途地域 →住宅=建築用途制限(1992)/第一種低層住宅専用地域、第二種低層住宅専用地域、第一種中高層住宅専用地域、第二種中高層住宅専用地域、第一種住宅地域、第二種住宅地域、準住宅地域、→近隣商業地域、商業地域、準工業地域、工業地域、工業専用地域

②市町村の都市計画に関する基本的な方針(都市・市町村マスタープラン)

③地区計画(1980→多様な運用可)誘導容積制度、再開発地区計画、用途容積型地区計画、住宅地高度利用型地区計画、集落地区地区計画、町並み誘導型地区計画

④特別用途地区

⑤開発指導要綱(履行曖昧弱)

⑥大規模小売店舗法(大規模小売店舗における小売業の事業活動の調整に関する法律/大店法/1,000平方メートル以下は自由裁量 規制緩和) →大規模小売店舗立地法(環境に配慮/平成12年6月1日施行)

3. 調査地域(注:石川郡河内町は隣接境界線が大部分山林野故に割愛)

[1]調査日時:平成10年9月-平成11年3月

[2]調査者:当該研究者等

[3]調査対象:街路景観、住宅景観における基調色(壁、屋根など)、支援色(門扉、扉、窓、垣根など)、アクセントカラー(ベンチ、道路標識、ポラード、環境具など)

[4]調査方法:車窓調査(Wwindshield survey)及び歩行観察における写真撮影

[5]分析方法:カラー写真プリントからの色差直読法/CIE1976準拠(以下各市町同じ)にて1,195色を基調色、支援色、アクセントカラーに分けて計測

[6]調査地域:金沢市周縁地域(図1)

- ①鶴来町隣接地域
- ②野々市町隣接地域(その1)
- ③野々市町隣接地域(その2)
- ④野々市町隣接地域(その3)
- ⑤松任市隣接地域
- ⑥内灘町隣接地域
- ⑦津幡町隣接地域(その1)
- ⑧津幡町隣接地域(その2)

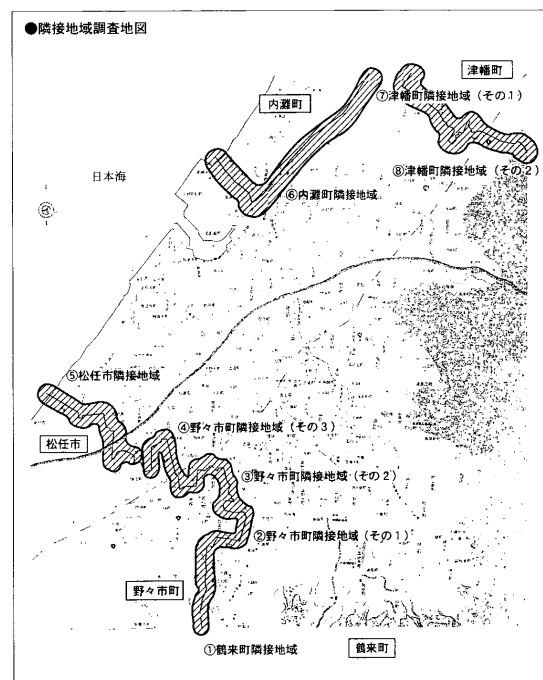


図1

①鶴来町隣接地域

面積:35.64 km²

人口:20,678人

世帯数:5,600世帯

鶴来町は金沢市の南約15キロにあって霊峰白山を背に、山合を下る丘陵地と手取川上流扇状地平野部との複合地勢に立地している。白山日羊神社の門前町としても名高い。地場産業の繊維木材産業に加え先端産業も盛んになって来た。獅子吼高原にはハン

グライダーの基地やスキー場など整備されレクリエーション産業も盛んである。(参照・石川県大百科事典/中野修一)

●色景例

・色景例(1)(写真3)・色景例(2)(写真4)・色景例(3)(写真5)

●色彩分析図

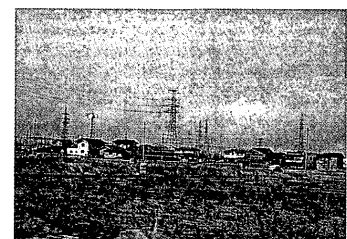
・基調色(図2)・支援色(図3)・アクセントカラー(図4)・明度値(図5)・彩度値(図6)



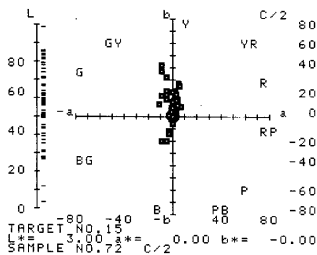
色景例(1)・(写真3)



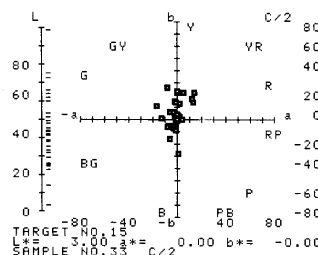
色景例(2)・(写真4)



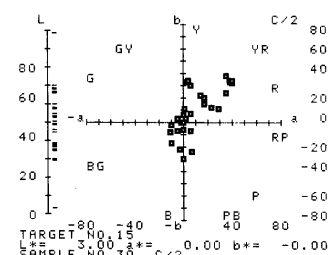
色景例(3)・(写真5)



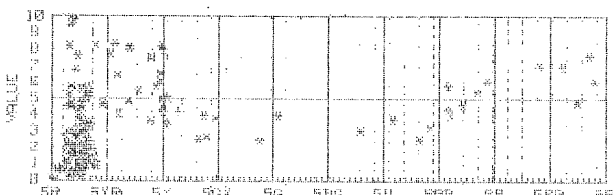
基調色・(図2)



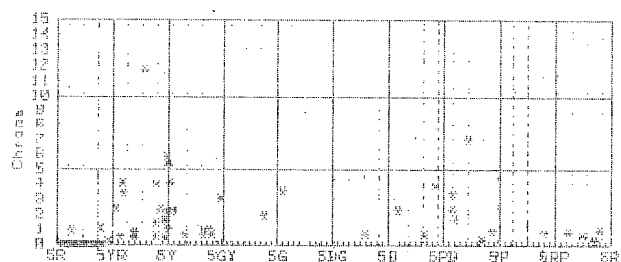
支援色・(図3)



アクセントカラー・(図4)



明度値・(図5)



彩度値・(図6)

●考察

この地域は、建設省が推進する「金沢・鶴来都市山麓グリーンベルト整備構想」の延伸上にあつて、都市近郊保全の先端的施策が期待される。金沢の中心市街地とのアクセスも容易で、背後地には獅子吼高原ハングライダー基地やスキー場、アジアの獅子頭を集めた民族系博物施設など高質のレクリエーションゾーンを抱えて往来も多い。

基調色/69色/シルバーグレイ、ベージュグレイ、鼠色、利久鼠など。

支援色/31色/深緑、わさびいろなど。

アクセントカラー/28色/ポピーレッド、わさびいろなど。

②野々市町隣接地域(その1)

面積:13.56 km²

人口:41,073人

世帯数:15,446世帯

野々市町は平坦な豊饒地に稲作や施設園芸などが耕作されて来た。近年は交通の便の良さも加担して典型的な都市近郊地帯として発展している。大型のスーパーマーケットやわが国を代表する工科系の金

沢工業大学が立地して関連した景観形成は都市近郊の在り方を映している。(参照・石川県大百科事典/笠岡橋)

●色景例

・色景例(1)(写真6)・色景例(2)(写真7)・色景(3)(写真8)

●色彩分析図

・基調色(図7)・支援色(図8)・アクセントカラー(図9)・明度値(図10)・彩度値(図11)



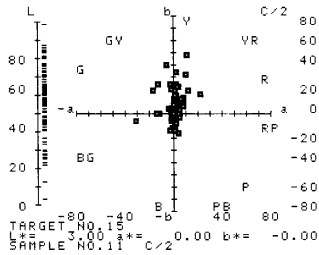
色景例(1)・(写真6)



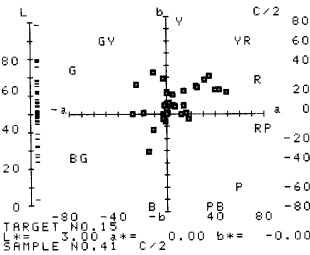
色景例(2)・(写真7)



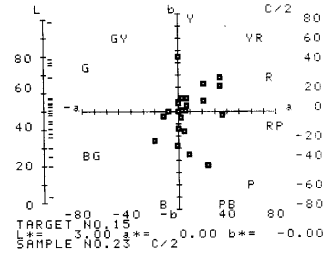
色景例(3)・(写真8)



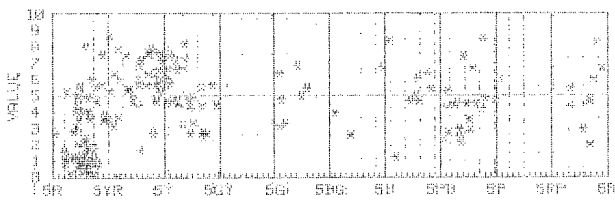
基調色・(図7)



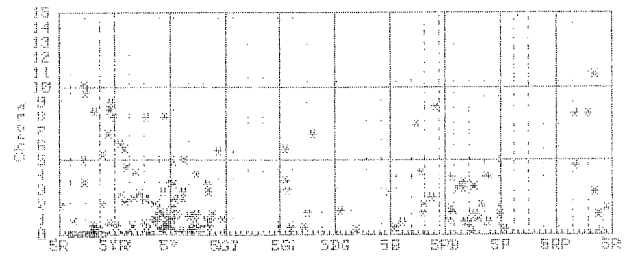
支援色・(図8)



アクセントカラー・(図9)



明度値・(図10)



彩度値・(図11)

●考察

この地域は、以下の(その2)、(その3)と合わせ変貌の度合いを最も注視したところである。ことに基調色と支援色、アクセントカラーのバランスは、残念ながら激しい高彩度な色彩とばらつきの多い色相、明度によって平衡状態を失っていて、今後共さらなる観察と一層の改善や支援策が必要な地域であることが判明した。

基調色/107色/亜麻色、栗色、煙草色、アイボリー、タンポポ色など。

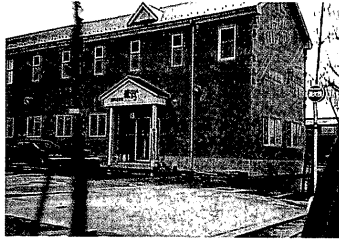
支援色/39色/ローズグレイ、白緑(びゃくろく)

アクセントカラー/21色/シグナルレッド、スカレット、うこんいろ、ターコイズなど。

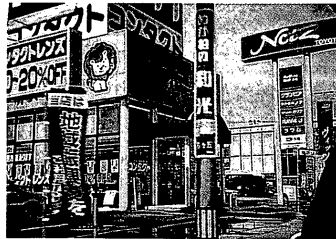
③野々市町隣接地域(その2)

●色景例

・色景例(1)(写真9)・色景例(2)(写真10)・色景例(3)(写真11)



色景例(1)・(写真9)



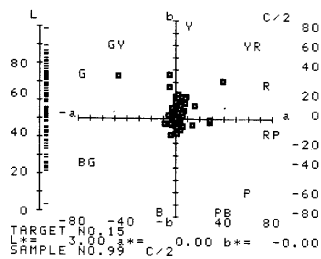
色景例(2)・(写真10)



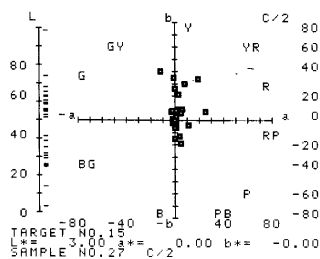
色景例(3)・(写真11)

●色彩分析図

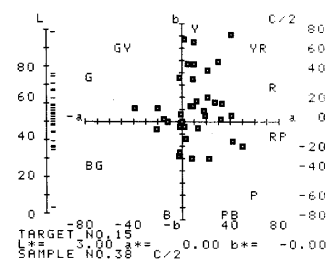
・基調色(図12)・支援色(図13)・アクセントカラー(図14)・明度値(図15)・彩度値(図16)



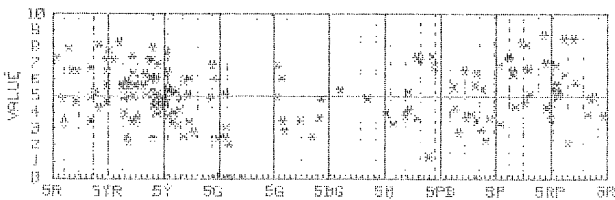
基調色・(図12)



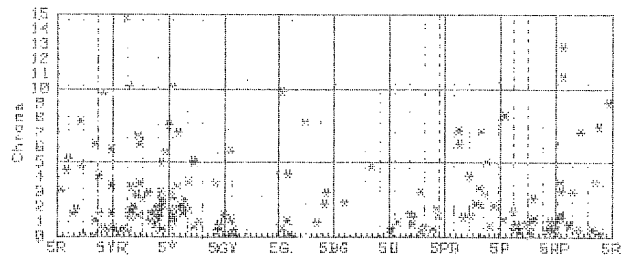
支援色・(図13)



アクセントカラー・(図14)



明度値・(図15)



彩度値・(図16)

●考察

この地域は、何よりもアクセントカラーの色相幅が大きく支援色が少ない。つまり夥しい色の洪水に見舞われていて色彩景観形成の主従の座が逆転している。さらには基調色に彩度が低く明るさ暗さの差の大きい色や無彩色が多いため、アクセントカラーを独走させ一層喧噪感の強い隣接街区となっている。

基調色/97色/青竹色、牡丹色、ねずみいろ、スカイグレイ、ベージュなど。

支援色/25色/オーカー、ひまわり色、とびいろなど。

アクセントカラー/36色/納戸色、セルリアンブルー、ベにいろ、紅梅色、カナリヤ色、スカーレットなど。

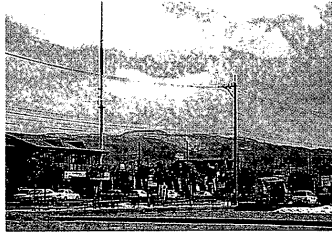
④野々市町隣接地域(その3)

●色景例

・色景例(1)(写真12)・色景例(2)(写真13)・色景例(3)(写真14)

●色彩分析図

・基調色(図17)・支援色(図18)・アクセントカラー(図19)・明度値(図20)・彩度値(図21)



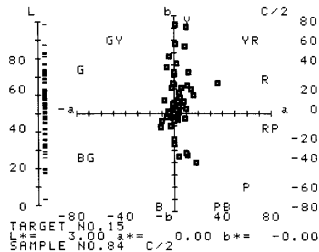
色景例(1)・(写真12)



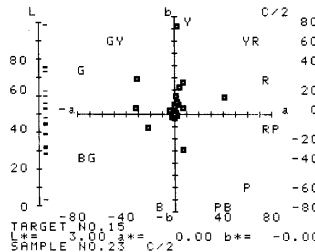
色景例(2)・(写真13)



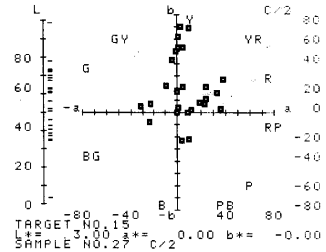
色景例(3)・(写真14)



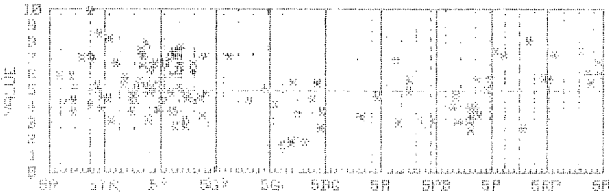
基調色・(図17)



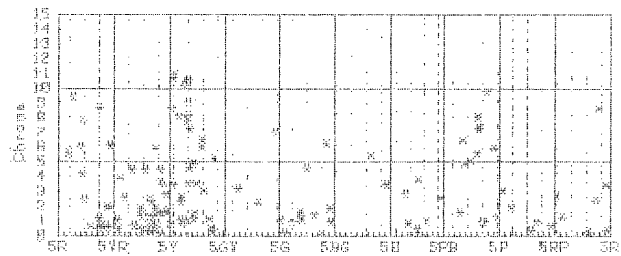
支援色・(図18)



アクセントカラー・(図19)



明度値・(図20)



彩度値・(図21)

●考察

この地域は、全ての計測値において黄色系に傾斜している。したがって際立の強い街路景観と穏やかな田園風景との間に齟齬感が強く周縁地帯の在り方として要注意地域である。また遠景、中景、近景の見え隠れの繋がりも途切れ地域空間の質が歪みつつある。建物の彩度も6以下が望ましいが彩度値に見るように高彩度が目立ち改善策が待たれよう。

基調色/82色/たんぼぼ色、白緑(びやくろく)、サックスブルー、スモークブルー、砂色など。
支援色/21色/紅色、薄浅葱、空色、ローズピンクなど。
アクセントカラー/25色/シグナルレッド、パンプキン、柿色など。

⑤松任市隣接地域

面積:59.93 km²

人口:60,609人

世帯数:16,502世帯

松任市は手取川扇状地に広がる典型的な田園都市である。特に七ヶ用水(しちかようずい)は扇状地の還流施設として、また文化の育み基盤として松任を象徴する。近年増殖する金沢のベッドタウン化から脱却

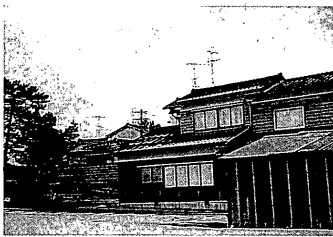
するための諸策が注目されている。(参照・石川県大百科事典/中野正吾)

●色景例

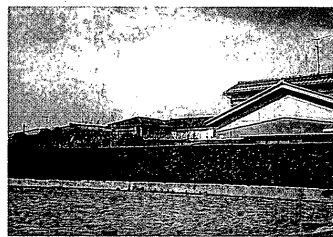
・色景例(1)(写真15)・色景例(2)(写真16)・色景例(3)(写真17)

●色彩分析図

・基調色(図22)・支援色(図23)・アクセントカラー(図24)・明度値(図25)・彩度値(図26)



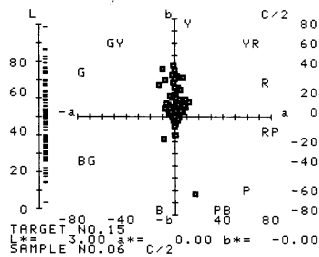
色景例(1)・(写真15)



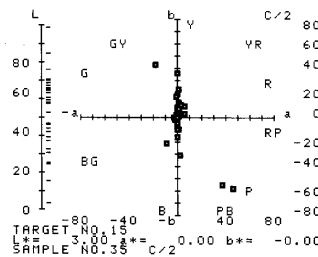
色景例(2)・(写真16)



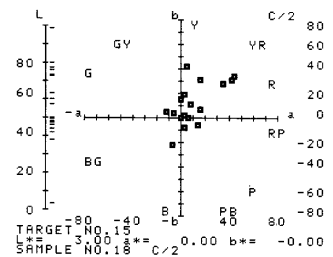
色景例(3)・(写真17)



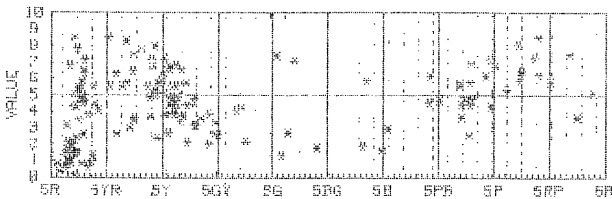
基調色・(図22)



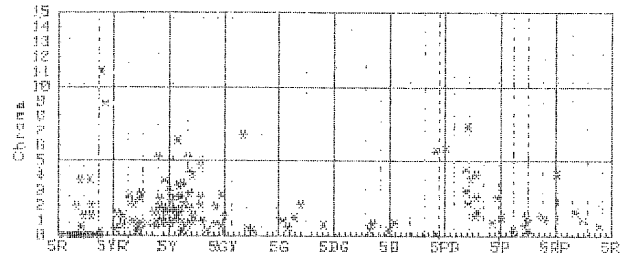
支援色・(図23)



アクセントカラー・(図24)



明度値・(図25)



彩度値・(図26)

●考察

この地域は、日本海を近くにした最も農村色の強いところで、基調色が比較的良好に残りしっかりとした周縁景観である。木色(もくじき)系の支援色も基調色に沿った彩度の低い色でアクセントカラーも少なく喧噪感もない。しかしながら今後の開発や再開発によっては隣接地域の影響を受けないと言う保証はない。景観条例の整備を望みたい。

基調色/103色/とびいろ、カーキいろ、金茶色、砂色。
支援色/33色/オリーブグリーン、ローズグレイなど。
アクセントカラー/16色/えんじいろ、小麦色など。

⑥内灘町隣接地域

面積:20.38 km²

人口:25,662人

世帯数:8,185世帯

内灘町は日本海に面した海岸砂丘と河北潟に接する干拓地の地勢に立地している。昔から長い間漁業を生業としていたが近年はサツマイモなどの砂丘作物など金換農業も盛んである。町の発展は金沢市の

郊外住宅化と連動して景観も年々都市化している。

(参照・石川県大百科事典/坪内健一)

●色景例

・色景例(1)(写真18)・色景例(2)(写真19)・色景例(3)(写真20)

●色彩分析図

・基調色(図27)・支援色(図28)・アクセントカラー(図29)・明度値(図30)・彩度値(図31)



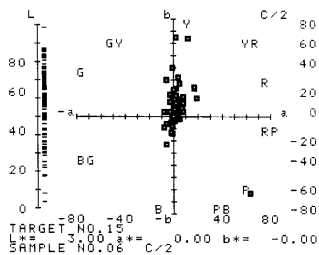
色景例(1)・(写真18)



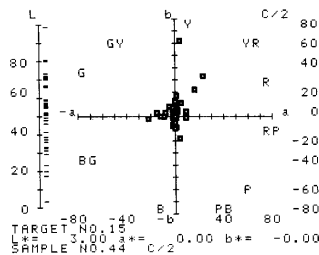
色景例(2)・(写真19)



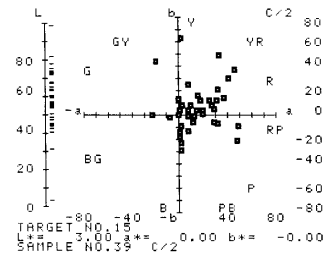
色景例(3)・(写真20)



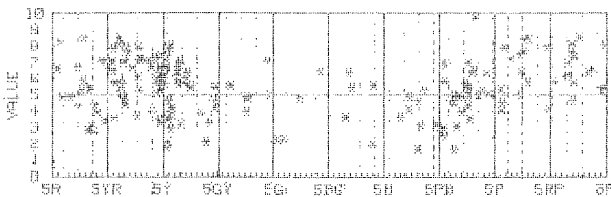
基調色・(図27)



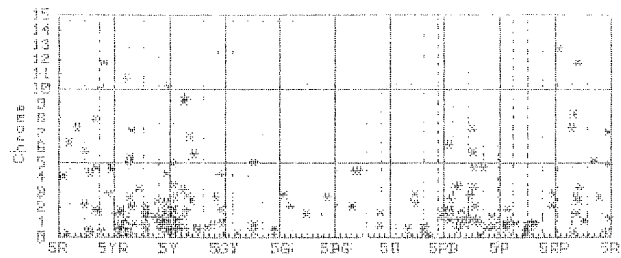
支援色・(図28)



アクセントカラー・(図29)



明度値・(図30)



彩度値・(図31)

●考察

この地域は、郊外都市を以て任じながらさらなる独自の景観形成を期待する様相がそこそこに見られる。新しい町役場はその良い例である。基調となる黄赤系の木の色に明るい支援色が重なった町並みが見えた。しかし屋外広告物などの激しい色に晒されつつあることも事実で、その対応が地域の明暗を分けようである。

基調色/103色/とうもろこし色、黄水仙、亜麻色、砂色、オリーブ茶、ベージュ、オレンジ色など。

支援色/42色/リーフグリーン、テリーピンク、灰桜、ときいろ、裏葉色など。

アクセントカラー/37色/つつじいろ、シアンブルー、紅色、若草色など。

⑦津幡町隣接地域(その1)

面積:110.44 km²

人口:27,840人

世帯数:7,448世帯

津幡町は金沢市と北部で隣接し、北東後背部に河合山、三国山、俱利伽羅山を擁し西部河北潟に向かって緩やかな平地が広がる。古くから加賀、能登、越中への交通、流通の要衝として発達して来た。米作農業と果樹、野菜が栽培されてまた産業の新興にも意欲的である。国道159号線の利便によって金沢市中

心部まで20分となり中条地区の太田、潟端を始めとして住宅建築が盛んで、金沢の郊外化現象を引き受ける格好になっている。

(参照・石川県大百科事典/花田鉄男)

●色景例

・色景例(1)(写真21)・色景例(2)(写真22)・色景例(3)(写真23)

●色彩分析図

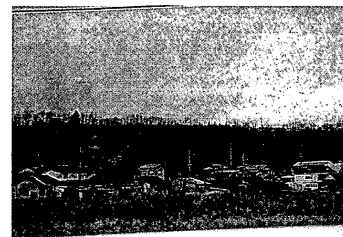
・基調色(図32)・支援色(図33)・アクセントカラー(図34)・明度値(図35)・彩度値(図36)



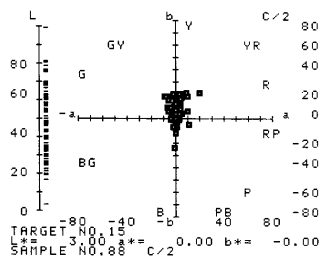
色景例(1)・(写真21)



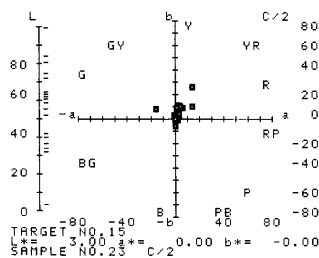
色景例(2)・(写真22)



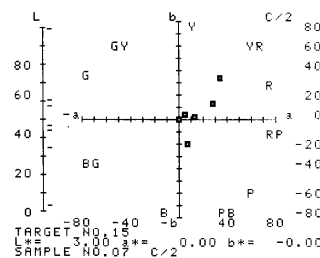
色景例(3)・(写真23)



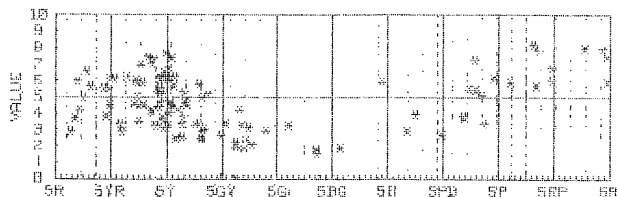
基調色・(図32)



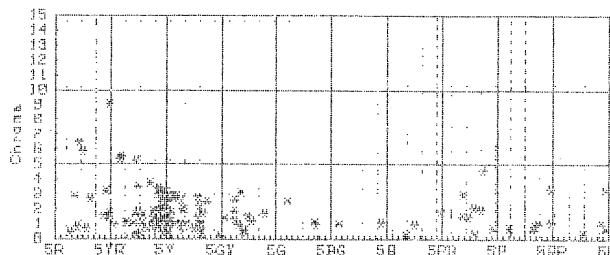
支援色・(図33)



アクセントカラー・(図34)



明度値・(図35)



彩度値・(図36)

●考察

この地域は、23平方キロメートルの河北潟に隣接し、宏大な干拓地を背に快適な空間が広がっている。農業政策における干拓の是非が問われた地域でもあるが、今では貴重なグリーンベルトとなって景観快適化に役立っていることが色彩データから読める。しかしながら遠景に点在する建造物の色彩とガードレールの白が風景を貧しくしている。

基調色/86色/バトルシップグレイ、ローズグレイ、あくいろ、鉛色、トープ、鳩羽鼠、ダックブルーなど。
支援色/21色/スカイグレイ、ローズグレイ、ベージュグレイなど。
アクセントカラー/5色/ブロンド、シグナルレッドなど。

⑧津幡町隣接地域(その2)

●色景例

・色景例(1)(写真24)・色景例(2)(写真25)・色景例(3)(写真26)



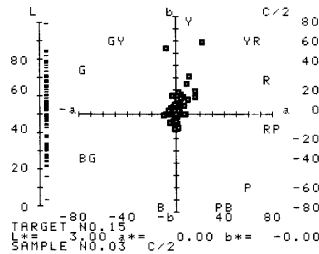
色景例(1)・(写真24)



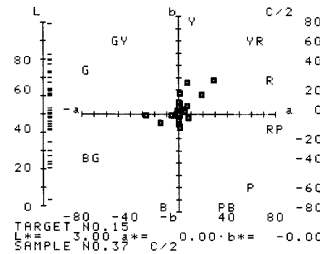
色景例(2)・(写真25)



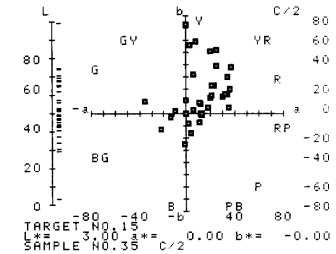
色景例(3)・(写真26)



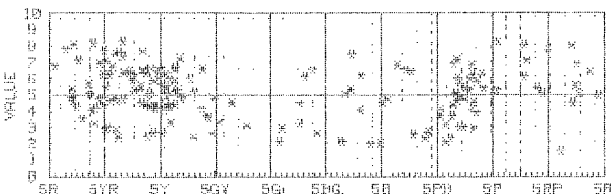
基調色・(図37)



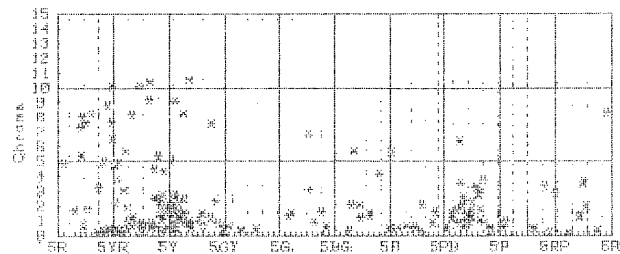
支援色・(図38)



アクセントカラー・(図39)



明度値・(図40)



彩度値・(図41)

●考察

この地域は、近郊外周の始発あるいは終着点であって、それゆえに金沢との隣接関係も濃く景観の変貌はいつも金沢の郊外景観として見据えられる。ひとつは集落の名残や面影への保全の如何であり、またひとつは郊外住宅による新しい衛星都市の誕生と重ねてイメージされる景観である。既に田舎らしさと都会らしい景観の複合的創出が始まっている。

●色彩分析図

・基調色(図37)・支援色(図38)・アクセントカラー(図39)・明度値(図40)・彩度値(図41)

基調色/100色/アイボリー、亜麻色、イエローオーカー、プロンド、スモークブルーなど。

支援色/35色/アクアマリン、シルバークレイなど。

アクセントカラー/33色/シグナルレッド、スカーレット、パンプキン、メドグリーンなど。

4. 近隣農村からのさらなる問い

農村の色は都市の色とも深く係わっている。前項でも触れたイギリス地方都市における周縁地の“カラーコントロール”の精神規定では、街のことはまさに村のことである。そしていまわが国では、さらなる野山や里村の広きにわたって景観の悪化が心配されている折りこの精神性は規範となる。其処此処に時と場所をわきまえない激しい色と光を発する巨大なショッピング、娯楽センターの建物や看板、サイン類。またよく目にする強烈な色彩の住宅も穏やかな村のたたずまいとは相容れない。あるいはまた最短距離をもとめ尾根を渡り行く長大な送電鉄塔や、携帯電話の送信塔もしばしば風景と齟齬の関係にある。心配して来た農村風景の崩壊が現実となった。報じられているように、農村は高齢化と過疎化によって虎の子の513万ヘクタールの優良農地の維持さえも危うくなっている。休耕田や放棄された山間の農地、間伐の労力が得られず衰微する山林や森など、私たちの生命線が危ういのである。そして調査事例でもしばしば見られたような景観崩しの追い打ちで、絵にもならなくなった農村はどこへ行くのであろうか。顔色が健康の尺度であるならば、荒れ果てて貧相な景観は村の病める顔色なのである。それ故に景観の改善にはあらゆるレベルの自助努力と支援対応が施されねばならない。ではどうすればよいのか。最も有効な視座に美化運動がある。アメリカの高名な都市問題研究者C.エイブラムスは著書で、美化運動は、地域性やグリーンベルトの保全、都市制度の学習や身代わり業者の牽制など、大地に結び付く全てのからくりを知恵を結集して立ち向かいかつ学ぶことにあるゆえにその効用を評価する。

また美的景観への問いは厳密な約束事として法に解決を委ねる事もできる。景観問題はしばしば置かれた立場と法的対応の複雑さによる次善の策に苦心が多い。最近の例では金沢市の兼六園に隣接して計画された高層マンションの高さをめぐる論議があった。高さ33メートル(10階建)で申請されたマンションに対して住民は、兼六園周辺の眺望が阻害される

として施主に計画変更を求めた結果、23メートル7階建で合意をした例などである。この地域では事を契機に地区計画を導入し、今後は15メートルが制限高となった。さらなる論議を法に委ねた例が「京都ホテル高層建築反対訴訟事件」である。判示事項は、訴えた京都の仏教会の人たちの原告としての適確性からはじまり、建築基準法、行政事件訴訟法、都市計画法など多くの法令と関わる厳なる手続きが開示されている。こんな例もある。歴史的景勝地「和歌の浦」における都市計画道路建設の公金支出差止めの景観訴訟では、文化財保護法や日本国憲法にも事の成否が照合された。

一方農村景観に関する国際的な施策も活発になっていて、OECD(経済開発協力機構)の快適環境の施策は、世界の農村地域開発を最重要プログラムと決め、1987年からシンポジウムの開催など国際的支援活動を行っている。石川県も1997年にこの関連のシンポジウムを誘致した。

このように見てくると問われる田舎らしさを育むためにも、色彩の自然、人文、社会に互る歴史や、芸術、心理嗜好、デザインあるいはまた美学的眼差しの導入など総合的な施策が待たれる。心が色彩を選び、色彩が心を動かす色彩心理のセオリーも学びたいものである。

5. 蘇るか金沢圏の景観色

これまで検証して来たことは、環境を色彩で読むと言う試みを軸に考察をしてきた。また色彩修復による景観の再生は色彩が関わる光や眼、心理、芸術などその広範な人間尺度によってその効果が期待されている。たしかに体温を色に置き換えたり、環境緑化の度合いを航空写真の色彩から判断することは日常的な生活尺度となっているが、周縁の色彩情報を知り都市の再生に役立てる手法はこの度の調査の大きな目的となった。色彩情報を都市の保全や再生に役立てようとするものである。診断資料の収集方法やさらには処方箋の詰めなどは医療行為に似ている。最後に調査結果を裏づけにして目的とした金沢近郊圏

の景観色の蘇りを検証したい。

都市や街、界隈に固有の色彩があってその土地らしさを説明していることは誰もが気のつくことである。同じ伝統都市であっても京都は黄色み茶色である聚楽(じゅらく)色が、また飛騨高山では泥紅柄(どろべんがら)が象徴色である。金沢は木材の色の変化による木色(もくじぎ)でその内訳は利久色、鶯茶、朽葉色、焦茶で黒い葦と緑樹がそれらを覆っている。木色を基調色に塀や門扉、樹木、草花などの支援色やアクセントカラーが加わって四季折々の街景表情となる。情報の収集は、まず色の組み合わせや表情を可能なかぎり写真に残すなどして客観的に観察しデータ化することが大切である。かつまた現実の色と写真で再現された色との誤差の扱いは古くて新しい問題だが、経験則によって補完してもよい。

加えて見て歩きによる観察と記述はより一層重要な考察方法で、街の風向や匂い、喧噪や静寂など異なる環境と複合的に記憶される色彩は時には景観診断の決め手となる。甲高い声が黄色を連想させるように色彩は共感覚情報であることも知っておかねばならない。

次に金沢の色へ蘇るための参照モデルを示し、近郊の色彩事情が金沢がこれまで蓄えてきた情報といかに異なっているかを比較する契機としたい。代表例として金沢らしさが最もあると言われる卯辰山の裾野の街、東山界隈の四季の色を基準に検証してみた。参照色とするのは1965年以来今日まで、筆者が撮影して来た写真とその観察ノートである。

金沢卯辰山麓寺院群の伝統環境保存区域は、城下が賑わい始めた17世紀の初め頃、大小50近い寺院が集められて出来た5ヘクタール程の歴史的町並みである。清流浅野川が流れ地域の人々の感性を担保してきた。

春がくると山麓の街や町は淡く明るい利久茶を思わせる色から、鈍い黄緑に見える若芽色や萌黄色に包まれる。春の陽光と花や木々の鮮やかな色に明快な色彩秩序が伺える。

夏には青や緑系統の色が主役だがわずかに緑がかった灰青色も風景に馴染んでいる。さらには錆納

戸など変化に富んだ景観が見られバランスのとれた色彩を呈している。

秋には夥しい落ち葉が明るく冴えた黄色や緑みのうすい黄肌色を示す。木造家屋は暗い灰黄色で石垣の明るく彩度の低い秋色の主題をなす。

冬には枯木のごとく薄い黄赤から赤みの殆ど無い暗い赤紫色や黒い屋根瓦が、寺院の多いこの町のシンボルカラーとなって暗く沈んだ明暗を醸し一層の落ち着きを与えている。いまこの美しい彩りの町の中心地、東山1丁目の「ひがし茶屋街」は、国の重要伝統的建造物群保存地区指定の有力候補として平成13年の指定が見込まれている。

次に都心の例を引いてみよう。金沢には色彩修復で極めて高い評価を受けている例が2カ所ある。一つは香林坊地区の再開発による色彩調和である。ここは1985年に第2回公共の色彩賞を受賞した。さらなる箇所は金沢駅東口の全日空ホテルや都ホテル、ホリデーイン金沢、日航ホテルをつなぐ灰桜色と柔らかなベージュ色による色調の揃った景観である。この色彩修景にはおよそ4半世紀に及ぶ周到で忍耐強い施策があり金沢らしさが蘇った。しかしながら重ねての心配は、日々建て替えられる住宅や商業、業務施設とその広告看板や公共施設の色彩の有様である。都市固有の色彩検証と調和への努力はこれからが本番のようである。例えば金沢西インターから市内へ入る沿道街路では、景観条例や屋外広告物条例を使った色彩整合の努力が町内をあげてなされその結果が注目されている。

先にも記したように金沢の色は黒い葦、茶系統の木色(もくじぎ)と緑樹を基調色として、四季の花、雪景色、用水を流れる水の色、城下町の風情を彩る着物や食物、祭りなど色を愛でる折り目正しい市民の作法によって担保されてきた。今日的に言うなら色彩文化のソフトウエアがしっかりしていた。このように伝統都市の空間はさらなる蘇えりに懸命であるが、騒色にまみれた近郊地域は金沢らしさから遠のくばかりである。それゆえに決定的な処方を持たれてならない。金色のベネツィア、灰色のパリ、白いヘルシキのように明快な固有色で説明出来る都市はそんな

なに多くはない。また固有の色彩イメージは金沢が期待するコンベンション(集会会議)都市を象徴する“もてなしの色”ともなる。したがっていまこそ長い歴史に培われた色彩文化を金沢圏再生の騎手にすべきと提言したい。

おわりに

本稿は色彩環境研究について、1998年以降に機会を得た、「都市化による近郊地域の景観の変貌に関する調査」(社)北陸経済調査会・石川県・の筆者担当部分と、研究中の「金沢市色彩誘導基準・建物編」及び本学海外研修制度による研究支援報告の第1報である。

調査は新しい情報を見いだすためにできるだけ多くの事実や条件を詳しく観察することに意味がある。この経緯で顧みたことは、郊外化という典型的な都市問題を色彩情報から検証することの難しさである。それゆえに風景に棲む文化の自明を明察していた次の一節に、あらためて驚かされた調査行でもあった。「…それから平野に出た。屋根の周囲に高い樹木をめぐらしたり、小さな森に囲まれた農家があちらこちらに点在している。西プロイセンの景観にそっくりだ。」昭和10年(1935)、桂離宮の日本美術再発見でも知られるドイツの建築家ブルノ・タウトが感嘆した北陸の農村の風景である。しかしいまは車社会と大量消費、規制緩和の中継地として陸続と建設される巨大スーパーや産業施設、住宅によってこのようなどかな農村風景を見ることはできなくなった。残された風景も、山を削り田畑を埋め川をよぎる人工物で寸断され、折り重なる極彩色の広告看板や多色刷の屋根、壁との調和に苦しんでいる。色彩景観はずっとこのかた都市において云々されて来たが、問題はついに農村にまで転移してしまった。

農はくにの本という。文中にも触れたが周知のOECD(経済協力開発機構)も、農村の快適な環境形成のプログラムを最重要に位置づけ調査、啓蒙に当たっている。ことに田舎への回帰を共にするルール(いなか)アメニティー運動は、より良い風景なくしてはあり得ないと説く。

ではまずどうすべきなのか。それは色彩の選択に際し、しかるべきところにしかるべく必要な色か否かを常識をもって判断することであろう。このような考えは本シリーズでも幾度か既報したように、イギリスのシビックアメニティズ法にあるまさに環境認識の基本でもある。さらには環境ISO(International Organization Standardization)の理念である、環境に関する価値観の変化を感じ取る感性の醸成も求められる。都市も農村も郊外化による景観破壊にさらされながらやがて20世紀を終える。タウトの眼差しから60余年、西プロイセンの風景はどうなっているのだろうか。郊外化問題と農村風景の再生こそ21世紀の課題である。

(以上)

出典/参考資料

- ・「都市化による近郊地域の景観の変貌に関する調査」(社)北陸経済調査会・石川県・(1998)
- ・石川県大百科事典/北國出版社(1993)
- ・色彩科学辞典/日本色彩学会・東大出版会(1997)
- ・「農村の色彩」/山岸政雄・北國新聞「舞台」(1997)
- ・金沢市中心部のスプロール化問題調査報告書/金沢市(社)北陸経済調査会(昭和55年3月-1980)
- ・研究発表稿「景観保全における色彩誘導について・金沢」山岸政雄(第30回日本色彩学会)(1999)
- ・招待講演記録「色彩規制と景観保全・日本の現状と21世紀への期待」山岸政雄“THAI COLOR 99”(タイ色彩学会/チュラロンコン大学/国際色彩学会/日本色彩学会)(1999)
- ・オスロ国際色彩会議講演集(ノルウェー色彩学会)(1999)

(やまぎし・まさお 色彩環境)

(平成11年10月29日受理)